

南極で2度お会いした村山さん

成瀬 廉二

村山さんに初めてお会いしたのは、第9次隊にて極点旅行を完遂し S16 からヘリコプターで昭和基地へ帰還した 1969年 2月 15日であった。その時私は第10次隊の越冬隊員で、昭和基地の建設作業を終え、観測器材や私物の整理を始めていた頃であった。ヘリポートまで出迎えに行ったかどうかは記憶がないが、昭和基地帰還後ただちに屋外で歓迎会が開かれた。



写真左．昭和基地に帰還した村山雅美隊長。左は川崎巖。

写真右．ダルマに目を入れる村山隊長。左から、蜂須賀弘久、村上捷征、小林昭男、川崎巖、遠藤八十一、柿沼誠一、楠宏隊長。



写真．極点旅行隊歓迎パーティー。中央：村山隊長、周囲に 10次隊の顔が見える。

その日の夕食時、昭和基地の食堂で、9次隊調理の小堺さんがものすごく嬉しそうで新しいネタで鮨を握って極点隊員にふるまっていた光景が、今でも鮮明に思い浮かぶ。

翌日は、9次 - 10次隊の内陸引継ぎミーティングを行い、地理の藤原さんからナビゲーションや雪氷観測の引継ぎを受けた。私たちとしては、さらにいろいろお聞きしたいことやアドバイスを得たいことがあったのだが、村山さんにとっては近郊の山の登山計画程度に見えたと思われ、すべてにわたり「問題ないでしょう」との一言だったような気がする。

2回目にお会いしたのは、第14次隊にてやまと山脈方面の内陸旅行の帰途、昭和基地まであと250km程度のZ40においてだった。1974年1月26日、第15次隊長の村山さんから、「セスナでそっちへ向かう」との連絡が入った。同日午後、私たち旅行隊が待機する上空をセスナ機が通過した。その直後物資を投下したように見えた。突然、機体は急に降下を始めた。「あー、どうしたんだ」と思う間もなく、セスナは雪面に対し45度の角度で突っ込み、サストルギの影に消えた。その瞬間は、「大事故」を確信した。

直ちに、雪上車で駆けつけた。セスナから降りて歩いてきたのは、村山さんと副隊長の村越さんだった。「いやー、落下傘が脚に引っかかっちゃったんだ」との第一声。まずは無事を祝い、再会の挨拶を交わした。物資は、生鮮品と日本からの便りだったと思う。その内すぐにパイロットに呼ばれて、村山さん等はセスナ機に戻った。エンジン音はするが、機体のダメージは大きいはずなので、「どうするのだろうか」と見守る中で、サストルギの起伏の多い雪面をガタガタと滑走して飛び立って行った。



写真．内陸氷床上を離着地するセスナ機（1973-74年）。
「事故」時の写真かどうかは定かではない。

墜落に近い着陸をしても壊れないセスナと、何事もなかったように操縦して行ったパイロットにいたく感心した記憶がある。しかし、後に話を聞いたり報告を読むと、当然ながらかなり際どいアクシデントだったようである。

（筆者：第10次越冬、第14次越冬、第34次夏隊：
現在、NPO法人 氷河・雪氷圏環境研究舎）

[注：写真はホームページ掲載時に挿入した]